アメリカの労働運動の盛り上がりに学ぶ

首都圏青年ユニオンの３人が米レイバーノーツ大会を報告

アメリカの労働運動がストライキで積極的に闘って勝利するなど活発になり注目されています。アメリカの労働運動では機関紙「レイバーノーツ」を発行し、労働運動の活性化を支える団体レイバーノーツが大きな役割を果たし、活動家が来日して、全労連の集会でも講演し交流を深めています。レイバーノーツは２年に１度大会を開いていますが、今年４月に開かれた大会に全労連から38名が参加しました。その中で首都圏青年ユニオンから原田仁希さん、尾林哲矢さん、冨永華衣さんの３人が参加しています。５月１日の公務公共一般のメーデー当夜祭で、首都圏青年ユニオンの３人がレイバーノーツの大会の報告をおこないました。報告の中からアメリカの労働運動の盛り上がりを支えているエネルギー、運動の考え方が伝わってきました。

レイバーノーツとは

尾林　レイバーノーツとは、1979年に創立されたアメリカ労働運動の再生と活性化を支えている運動団体で、「レイバーノーツ」という機関紙を発行する教育団体でもあり、また各産別労組、ローカル労組、現場から変革していく全米の活動家の結集体でもあります。

２年に一度大会を開催していて、僕らはそれに行ってきたんです。そこに全米から活動家が、さらにブラジルとかオーストラリアとか、僕たち日本からなど世界の活動家が集まって、現場の運動で大きく組織を変えたかとか、社会変革に寄与したという報告を交流してきました。レイバーノーツは労働運動で人権を取り戻そうとしている労働運動活動家の声であるという話もありました。具体的には職場での組織化、譲歩しないで戦う攻撃的な戦略、民主的で組合員中心の労働組合を広めることがレイバーノーツの運動の目指す方向だということでした。

つまり、下からの組合員自らの運動を展開することが大事であり、さらにより強い運動作るために、異なる労働組合、労働者センターの労働者との横のつながりの強化を推し進めてきたということです。

僕は４月18日に日本を発ちシカゴに着きまして、19日、20日、21日がレイバーノーツの大会でした。22日はレイバーノーツの大会は終わったんですけど、メーデー発祥の地をめぐるツアーに行き、現地の大きい戦闘的な UE と CTU という組合とも懇談を行いました。23日にアメリカを出て24日に帰ってきました。

冨永　これは、レイバーノーツの会場にあったグッズですが、“ALWAYS ANTIFASCIST”って書いてあるんです。反ファシストって書いてあって、アディダスのロゴをもじったものでアディダスの文字がアンチファシストになってるんです。あとフリーパレスチナ＝パレスチナ解放をしろとも書いてます。画像のこの右側がオールジェンダートイレです。女性専用のトイレも会場にあったんですけど、オールジェンダートイレがあって、みんなここにずらっと並んでいて個室に入るまでみんなでずっと同僚とかと話しながら、いろんなジェンダーの人たちが並んでいる光景がすごい新鮮で、日本でこれできるかなと、色々なことを感じました。

次はアジア労働者会議で私は18日に参加したんですが、ここには中国、韓国、台湾、シンガポール、そして日本から来た人たちです。中国からは香港からと中国本土から来た人がいたのですけど、ここではアジア人の連帯みたいな感じで、西洋では感じられない連帯と愛を感じると言っている参加者もいました。私自身は、日本が台湾とか中国とかを植民地化して支配していた歴史を考えると、居心地の悪さも感じたりしました。

このイスルっていう人がパレスチナの話をしてくれたのですけど、DECOLONIZE（脱植民地化）というタトゥーを入れていて格好良かったです。アジアの状況はいろんな政策とか政府の態度とか日本とすごい似てるなあっていうふうに思いました。

尾林　どんな感じで似てるんですか？

冨永　例えば台湾の移民政策は新しい奴隷制度だと言ってる台湾からの参加者がいて、日本でも技能実習生の問題とか新しい奴隷制度だって言われてるし、同じことがいろんなところで起こっていると思いました。ベトナムとかミャンマーとか、そういう東南アジアの人たちを日本は労働者として、そういうふうに使っている現状もあるので、日本の立ち位置が複雑だなと思いました。

尾林　日本は移民としてじゃなくて人材としてしか受け入れてないんですよね。それに近い状況が東南アジアの国にもすごくあるんだなと思いました。

地域住民と一緒になって闘う教員組合のストライキ

尾林　じゃあ次行きましょう。僕はレイバーノーツ初日からがスタートでした。最初、教員組合のワークショップに参加しました。いくつもワークショップがあって、大体２時間で、20から30ぐらいのワークショップがあって、それぞれ選んで参加するんですね。

原田　これは僕が参加してるんですけれども、教員組合がアメリカでは強くて、教員の組織率が高いんです。以前はそんなに強くなかったんですけども、2012年にシカゴ教員組合が大規模なストライキを行って教員の運動に火がついた。もっと言えばアメリカの労働組合運動に火が付いたような出来事を教員のストライキが起こした経緯があるんですね。

2012年頃からシカゴの教員組合のストライキを契機に運動が広がり、ストライキをすることで、全米各地の地域の教員の組合がどんどんストライキをおこなう。分科会でいろんな地域の教員の組合がストライキをしたと報告され、大体１週間～2週間ぐらいストライキするんですけれども、ストライキに至った経緯とか、ストライキの取り組みの中で学んだこととか、そういうのをみんなで交流し合う。教員も運動が強いのでかなり関心が高くて、もう会場は満杯ですね。

アメリカは学校の廃校がすごい問題になってるんです。新自由主義政策で特に貧困地域、例えば黒人の地域の学校は貧困地域でそこが廃校になる。それがどんどん多発していて、そういった貧困地域の教員たちが、ここで学校潰れたら困ると言って、地域の人たちと一緒になってストライキに取り組んでいく。労働組合だけじゃなくて地域の保護者、学生、生徒も一緒にストライキに取り組む。

ドローンを使ってストライキの様子を映像にして、それをキャンペーンに使ったとかいうことも言っていて面白かったですね。

尾林　僕は、「大衆教育を使ってトレーニングする」というワークショップに出ました。大衆教育が何なのか説明で、登壇者というかファシリテーター（進行役）の人は対話によって組合の経験を引き出して、経験を交流する中で、どこに自分たちの労働環境を変えるパワーがあるのかを探る。それによって自分たちが労使関係を変える力を持っているんだと組合員に自覚してもらう。そういう場が大衆教育だということでした。

緊急職場組織委員会 EWOC というのがあって、新型コロナ禍で多数のエッセンシャルワーカーが感染の危機の中で働いている状況になった。

これをDSA（アメリカ社会民主主義者）という左派の党派とレイバーノーツが協力してEWOCというのを立ち上げてエッセンシャルワーカーたちを組織化して、なるべく感染リスクの少ない職場を労使交渉によって作っていこうという活動団体を組織した。このEWOCの人が参加していました。

また、MIT（マサチューセッツ工科大学）教員組合から現場のリーダー的なオーガナイザーの組合員が登壇して、職場を組織したいというリーダー層に向けて、組合員がストライキなどに立ち上がってもらうため、どのように大衆教育をしているかという報告をしていました。

このMITの取り組みが面白いんですけど、職場のリーダー的な人、大学でいうとカフェのリーダーとか、シャトルバスのリーダーとか、そういう大学内でも散らばった職場にいるリーダーたちを集めて、年2回セッションをやるそうなんです。集まって輪になって、今のみんなの働き方について、こういう思いをしたことがある、こういう苦難にあったことがあると言うのですね。近い問題意識を持った人達でグループ化して、じゃあどうやって変えていこうかと、本当に現場の人たちのやり取りをもとに、組合活動のモチベーションを上げていく、そういう取り組みをしているそうです。

専従者がやることはファシリテーターになることらしいんですね。その場を回すことだと話していました。冨永さんが出たワークショップはどうでした。

労働者の権利は障害者の権利

冨永　私は「労働者の権利は障害者の権利」というワークショップに出たんですけど、まずワークショップの前にミーティングで、最初にどのようにしたらワークショップに参加しやすいかを提案しあいました。例えばマスクをつけられる人はなるべくマスクつけようねとか。車椅子の方もいたので、通りやすいように道を開けようとか、発言の要約を司会の方がしてくれたりとか。途中でストレッチする時間を設けようという提案も出された。ワークショップが１時間40分だったので、半分のところでストレッチする時間ももうけようと。司会者の人は「それ忘れるかもしれないからリマインドしてください」と参加者に言って、参加者が「オッケー」と言ったり。

参加している時に動いたり、何か物を食べたり立ったりして参加しても、関心の高さとか貢献度とは関係がないと司会の方が言って、みんなが参加したくなる方法を見つけていこうとも言われていました。それも司会の人が一方的に言うんじゃなくて、参加者から色々提案してもらって、みんなで一緒にワークショップを作り上げていくという感じでした。障害の有無に関わらず、そういう主体的な場づくりはすごい良いなと思いました。

ワークショップではまず社会が言う障害者というのは、資本主義の中で働けないとか、生産性がないとされる者たちだと言っていました。それはなにか労働運動の中のでも健常者主義みたいなものがあって、障害者が見えていない運動で取りこぼしてしまっている現状があると言っていました。レイバーノーツ大会自体も、例えば手話通訳とか文字起こしとか、車椅子の人が通りやすいようにすることが全然なされていなかったんですね。

労働運動が求めているのはその資本主義に対抗することだし、資本の形成を資本家とか経営者たちが思うとおりにやらせないで、労働者に権利を取り戻すことだと思うので、労働者の権利と障害者の権利はつながっていると思うし、労働運動こそ障害者の権利を訴えていかないといけないと改めて思いました。

尾林　次は「多数派になる前の労働組合」のワークショップですね。原田さんが通訳してくれたワークショップだったんです。このワークショップは職場の多数じゃない労働組合＝プリマジョリティの報告です。

アメリカは職場の多数の投票を得ないと交渉権得られないのです。だから交渉権がまだない

中で、いろいろ組合運動をやっている人たちですね。

原田　プリマジョリティユニオンみたいな呼ばれ方をしていて、アメリカの大学院生達がすごく組合入ってるんです。ここ２年ぐらいでUEって組合が組織化してるんですけど3万人の大学院生で、キャンパスで働いてる人達がどんどん労働組合入ってるんです。研究助手とかそういう人達。その人達の一人が出ていたんですけど、各大学で多数派ではないから、交渉権があるわけじゃない。日本の青年ユニオンとか公共一般と似ている感じでした。労働相談を受けるし、相談を受けて交渉権はないけども、キャンパス内でこういう運動とかキャンペーンを取り組むと解決できるんじゃないかときめ細やかにやってる感じでしたね。

Google と親会社アルファベット労働者のたたかい

尾林　Google とその Google の親会社のアルファベットという企業の従業員の作ったアルファベットユニオンの労働者のワークショップにも参加しました。ユーチューブのエンジニアをやってた人達です。この取り組みは確かに面白かったです。この一番右の人ですけど、６年働いていて労働組合活動が３年半なんですね。組合攻撃も多い大変な企業らしいですけれど、2000年代初頭にこのアルファベットが軍事企業といろいろ締結して、軍需産業に関わるようなことをやっていた。これに対して内部で少数派だけれども組合を作って立ち上がった組合です。その広がり方も面白いですね。

原田　アルファベットの中にユーチューブとか、いろんな子会社というのか、下に IT 系の企業がある。各会社で多数派は取れないけれども、横の連携、アルファベット内での横の連携を取る。交渉権を勝ち取るより、いろいろな企業で労働者の連帯をできるようにする。一つの企業に作るとそこだけの問題に終始しちゃう。アメリカは労働契約が２～３年で更新されるのですが、それに向けてどれだけ良い労働契約を勝ち取れるかが労働組合運動のメイン課題なんですけど、その個別企業との労働契約＝一つの企業での労働契約というよりいろんな企業で横の連帯できることを優先し、敢えて少数派でいる。だから本当に個人加盟的な形で企業横断的にやってるのが面白い。

さっき尾林さん言った軍需企業との締結とかCEO のセクハラ問題など、労働条件の課題だけではなく社会正義の課題を取り組むことで組合員を拡大している。

尾林　少数派の活動で面白いのは組織化戦略がすごく緻密なんですね。少数だからこそというか、部署ごとにとか、地理的な関係でここにこれだけ労働者がいるとかマッピングするんです。全部地図にするんです。労働組合のアンケート調査を全体に行き渡らせるためにマッピングしてアンケート大量に集める。話したことないけど、メールアドレスを知ってる労働者がいっぱいいるから、そういう人に組合の誘いのメールを送るとか、あと SNS 活動を活発にやったり。会社批判の署名活動で広げたりとか、そういう活動をしているそうですね。

パレスチナ問題の取り組み

冨永　次に私は、「停戦を超えて長期的視野に立ったパレスチナ問題の取り組み」というワークショップに行ってきました。次のスライドお願いします。動画なんですけれど。これがワークショップの一番最初にみんなで交流しようということで、パレスチナを解放しろというコールをみんなでやったんです。この会場も満員でみんな手にはパレスチナのスカーフを巻いていました。２年前はパレスチナのワークショップは一つもなかったらしいんです。でも今年は検索したら20ヒットしたって話していて、もう本当にこれをここで終わらせないといけない。しかもそれを労働運動で終わらせるんだっていうのがみんなの意識でした。

労働運動のコレクティブパワー＝集団的な力をリベレーションムーブメント＝解放運動のために使わなかったら正しくないと言っていたのが印象に残りました。労働運動は、資本主義の搾取から労働者を解放する運動だと私は思ってるんですけど、政府というのは戦争とか虐殺を金儲けの為にやっていて、それに労働者が加担させられてるっていう状況で、殺されている人たちだけじゃなくて、それに加担させられてる人、殺す側に回さられている人たちの状況も、労働運動で変えていかないといけないんだ。パレスチナの問題は労働問題なんだという認識が共通認識でありました。

さらに労働運動がステートメントを出すだけでは足りないと言っていて、いろんな労働組合が、停戦をしろとか虐殺やめろという声明文を出しているんですけど、それだけじゃ足りないと。その政権を批判する、虐殺に加担してる政府とか会社をきちんと批判して、しっかり運動につなげていくっていうのが重要だ。ここで始めるんじゃなくて、ここで終わらせないといけないと言っていて、本当にその通りだなと思い、ステートメントだけじゃなくて行動に移して行かないといけないと思いました。

尾林　これも組合の人が登壇して話したんですか？

冨永　組合員のパレスチナ人の人たちが何人か登壇しました。そのあとパレスチナ解放運動を20年ぐらいずっとやってるみたいな人とか発言しました。その人も多分40代ぐらいで、若い頃からずっと運動してるんです。もうそこの部屋中のエネルギーがとてもすごかったし、本当に労働運動でパレスチナ開放をするんだっていうパワーを私たちが持ってるっていうふうに感じられました。

尾林　確かにレイバーノーツ全体でパレスチナ解放の声っていうのは今回一気に増えたんですね。

原田　特にアメリカでは今すごいパレスチナ解放運動盛り上がっていて、皆さんニュースで見てると思いますけれど、大学のキャンパスを学生たちがテントを張って占拠する。弾圧が凄い起きてますけど、30～40くらいの大学に広がったんですけど。

全米に広がって僕は姉がアメリカ住んでるんですけど、税金を払いたくないって言うんです。アメリカはイスラエルの軍事資金を提供していますし、本当にそれが自分たちの税金だと思うと当事者性もアメリカは強いというイメージがありました。

冨永　今日のメーデーのコールでも税金を軍事費よりも暮らしに回せというのがあったと思うんですけど、本当にそういう感じで、さっき原田さんが言った学校の廃校の問題とか、ジェントリフィケーション（都市の富裕化と低所得層の締め出し）の問題とか、お金が公共の施設とかくらしの政策に回ってなくて、アメリカも本当に貧困が進んでいる。それなのに軍事費にはめちゃめちゃ投資をしている。ジェノサイドにも加担している。それで自分たち労働者が提供しているサービスが人を殺すことに使われていることに本当に怒っている。

それで、大学構内でエンキャンプメント、キャンパス内で野営というかテントを張って抗議をしている。それは全米だけじゃなくて全世界に広がっていて、東京大学でも今やっています。上智大学でも今月始める予定なので、日本にも広がってきている。そのキャンプに参加している人たちで、レイバーノーツで友達になった人たちから写真とか送ってきてくれて共有しています。

教員組合出身のシカゴ市長が参加

尾林　多分パレスチナ解放運動でもいかに人を巻き込むかという組織化活動があるんですよね。次は全体会の話を原田さん。

原田　レイバーノーツ大会は三日間あるんですけれども、毎回最終とかに全体会というので、一番でかいホール会場でありました。スピーチ形式の話を聞く感じで、すごい盛り上がってるんですね。

尾林　シカゴ市長が話したのですね。シカゴ市長は、最初に言ったシカゴ教員組合の2012年の運動を率いたオルガナイザーの一人なんです。その前の市長がエマニエルっていう人で、今駐日大使になっていて、日本にいるのですけど、この人は極右的な最悪な人でシカゴはその市長のせいで苦しくなったんです。教員の組合出身の今の市長を組合が押し出してエマニエルを倒して市長になった。その市長がレイバーノーツとも深い関わりがあるのでスピーチしに来てくれてた。

あとはスタバの人とか、ポートランド教員組合が多数派を取ったぞって言って歓声上げてました。アメリカは共和党と民主党の二大政党制で、この人は民主党で市長になったわけです。じゃあ、ちょっと冨永さんから。

冨永　この全体会と同じ時間に、デモが会場の前のハイアットホテルの前でやっていました。これはアナウンスされたわけじゃないのですけど、いろんなワークショップで6時半からデモがあるといろんな人が呼びかけていた。フライヤーを作ったり、有志がやっていて、人が集まっていました。

動画を見てください。これがその様子なんですけど、たくさん人がいて道を塞いでやっていました。警察が途中で来て、どきなさいとか道を塞ぐなって言われたんですけれど、みんなでパトカーを囲んだ。

尾林　チカチカしてるのがパトカーですね。

冨永　そとうそう。途中でパトカーがサイレン鳴らし始めると、それをビートにするみたいな感じで踊ったりした。凄い規模も大きかったです。

動画の次いきます。これは二人が不当に拘束されたんです。それでその人たちを開放しろと警察に訴えていった。拘束された人たちはこの建物に連れていかれたんです。それでみんなで建物のドアの前に押し寄せてパトカーを叩いて、迫力が凄くて権力を絶対信じないということが前提としてあると感じました。このデモに私はアメリカのスタバユニオンの人達と一緒に参加したんですけど、その人たち、お菓子とか詰めて持ってきて準備が良かったです。

そんな感じでみんな出てきて、パレスチナ解放を労働者たちがやるんだっていう自覚があって、凄いパワーを感じました。そしてその後で拘束された二人は開放されたんです。すごい人々の力を感じました。

冨永　シカゴ市長が全体会で話しているから、全体会の会場に行って「仲間が二人拘束されて、市警は市長の管轄だからに解放を訴えよう」っていうことになりました。みんなで全体会の会場にコールしながら乗り込んで私も行ったんです。けど、そこでレイバーノーツの運営の人達にもう市長出て行ったとか言われたんです。

尾林　それでは二日目ですが、原田さん、全体会はどうでした。

ハリウッド脚本家組合のストライキをチームスターズが支援

原田　二日目も一日の全体会と同じようにスピーチがいくつかありました。この方は今井さんという方で日本人ですけれども、アメリカで看護師をずっとやっている方で、コロナ禍の看護師が酷い状況で、それでストライキに立ち上がったと話してくれました。今までは全然労働組合と関わりがなかった方ですけれども、2020年か2021年で看護師組合のストライキに関わったという話をしてくれました。

ハリウッドの脚本家のストライキについてライターズギルドの方も話してくれましたね。俳優組合と脚本家組合のストライキはみなさん知ってると思いますけれども、さすが脚本家という感じですごい詩的なスピーチをしてくれて、韻を踏んでいるような格好いいスピーチで面白かったですね。しかも内容も面白かったんです。脚本家組合のストライキの時にチームスターズという運輸関係でドライバー関係の有名な組合があるんです。そこがストライキに協力してくれて、プロダクションの映像開始のスタジオとかの運送を止めたんです。それでプロダクショ

ンが機能しなくなっちゃった。それで勝ったんだ。これはみんなの勝利なんだ、労働組合間の連帯の勝利なんだと。

さすがチームスターズだなって思いました。チームスターズは歴史的にすごい先鋭的な戦う労働組合でしたが、腐敗した時期もあるんです。あともう一人UAW（全米自動車労組）でしたかここ2、3年で組合活動始めた人がこの大会でスピーチをバシッと言ってすごく面白かたです。

現場の労働者（＝ランク・アンド・ファイル）が運動を動かす

レイバーノーツ全体で特徴的なのはランク・アンド・ファイル＝Rank&File という言い方するんです。ランク・アンド・ファイルというのは現場組合とか前線の労働者みたいなニュアンスです。あと草の根という意味です。だから組合っていうのは幹部のものでもないし、誰かが勝手に運営してるものじゃなくて、現場労働者のものなんだというような理念を強く発信しているんです。

私たちはランク・アンド・ファイルの労働組合なんだってよく言うんですよね。現場主義なんだと。だから当事者の組合員が組合を運営するし、私は組合活動するし、私がストライキするし、私たちがオルグすると言う。そういう何かに任せるとかじゃなくて、自分たちで下から運動を作るんだっていう風なのがあって、そういった現場組合の人たちがバーンとスピーチで盛り上ることもしていくのです。

尾林　登壇者は大体ランク・アンド・ファイル（Rank&File）の組合員ですよね、現場組合員の人。

冨永　しかも、肩書きみたいな感じで言いますね。私はランク・アンド・ファイルユニオニストですみたいに。草の根労働組合の活動家です、みたいに言っていました。

原田　だから一つのアイデンティティというか。

尾林　というかレイバーノーツの直近のテーマですよね。もうランク・アンド・ファイルユニオニストがいかに組合全体を変えていくかという。

原田　背景としてアメリカの労働組合は大きかったり強かったりする場合もあるけれど、上の人たちが勝手にやっていくところもある。日本の連合と同じ現象が長年あったんですよ。それに対してすごい反抗をするし、それをどうにか変えなきゃいけないということで、ランク・アンド・ファイルという思想がどんどん生まれてきたという経過だと思います。

冨永　みんなスピーチうまいなーって思いました。これをやりましたとか、この結果になりましたということを言うよりも、自分たちのことを話すのが上手だなと思った。私はこういうことがあって、こういうふうに思って、だから労働運動始めてこういうふうにやっているんだということをすごく上手に語る人たちが多くて、何を成し遂げたかとか今自分が何の役職に就いているということじゃなくて、どうして労働運動をやっているのかということを、私たち専従も組合員も話していく、外に出していくっていうのがすごく大事だなと思いました。

MIT＝マサチューセッツ工科大学のストライキ

原田　それ、うちのワークショップでちょっと。スピーチの仕方みたいなワークショップがあるんですけど。

尾林　じゃあ次のワークショップですね。僕が出たワークショップは「民主主義とストライキ」というところでした。今のランク・アンド・ファイルの組合員も登壇していたのです。

このMIT（マサチューセッツ工科大学）の労働組合のストライキがすごい印象的でした。多数派じゃなくて交渉権を持つ労働組合としての労働組合投票で勝っていないので、違法ストなんですけど、現場の声が止まらなくてSickout（＝病欠）という形で、病欠を一斉に取るという形で

のストライキを現場の主導で決行したという事例でした。

組合のリーダーがドーナツとコーヒーを持って、毎朝組合員と対話しに行って、要求があるならストライキやろうとか話して回るんです。その呼びかけによるアジテーションがかなり火をつけて、組合員がリーダーを超える要求をもつようになるんです。

だからリーダーが言っていて面白かったのは、インフラとして集団的な決定を作らなければならないと言っていたことです。集団的な決定ができる仕組みを作らなければいけないんだというのがすごい面白かったです。

このリーダーがストライキの途中で交渉する。相手は地域行政なんですね。行政が一定の要求を飲むと言ったときに、じゃあもうストライキをみんなやめようかと会議で言ったところ、その場にいた組合員たちがみんな帰ってしまうんですね。ストライキやらないなんて信じられないというような状態にまで燃え上っていて、それに乗っかって Sickout を一斉にやろうと言ったら、全部要求が通ると言うですね。

じゃあ冨永さん専従としてのランク・アンド・ファイルですね。

専従は何ができるのか

冨永　はい、そこでは専従は何が出来るのかということを話していて、印象に残ったのは、専従は組合員をアジテート＝煽るのが役割だと言っていたことです。このアジテートっていう言葉は、レイバーノーツの大会通をしてかなり出てきて、アジテーターとかアジテートする人っていう言葉が出てきた。労働者のモチベーションをいかに高めるかとか、いかに会社への怒りとか悔しさを運動につなげていくかをアジテートするのが専従なんだと言ってました。

「We didn’t win but I feel like we won」というふうに書いてるんですけど、その登壇者が専従で、組合が長い争議を終えた時に、争議は負けたらしいんです。負けたけど「争議には勝たなかったけど、勝ったような気がする」と言っていて、これがすごい大事だなあと思いました。争議の勝ち負けも勿論大事だし、その労働者の権利を取り戻すために姿勢を強めていくのは大事なんですけど、コミュニティとしてのユニオンとか労働運動自体、運動すること自体が重要なんだっていうことに確信を持ってもらう役割が私たちの仕事なんだなと思って、ごくいい言葉だなと思いました。

尾林　いいワークショップですね。

冨永　そうですね。組合専従は離婚率が高いみたいな統計があるらしくて。それを言われた時にはみんな会場の人達が笑ってましたけれど。

尾林　この「We didn’t win～」の話は「民主主義とストライキ」でも同じ話が出ていました。「民主主義とストライキ」の分科会に出ていた人達もストライキの結果、たとえ要求が通らなくても、団結が如何に強化したかという指標で振り返るべきだと、会場からの発言であったんですね。如何に成果を挙げるか、如何に金銭で獲得するかよりも、如何に団結を強化するか、如何にコミュニティの力を強めるかという見方がリーダー層の専従でも、現場でも浸透してるんだなと思いました。それすごいことですよね。

次は、僕が参加した Portillo というホットドッグチェーンに対するストライキですね。実際、ストライキがあったんです。労働組合投票で多数派投票を獲得して、会社に団体交渉を申し入れたんだけど、会社がその投票は民主的にやられていないと主張して、団交拒否をしたんですね。いわば。それに対して抗議の声を上げるストライキでした。これは Portillo という看板ですね。こんな感じで道行くドライバー達にも、横断幕を広げてアピールして行ったりするんです。

参加しているのは100人くらいかもうちょっといますかね。ストライキが面白くて店舗の周りをぐるぐる回るんです。コールしながら。店舗の多分敷地内なんだけど入っちゃって。働いてるのがメキシコ人と韓国人中心の移民が多い職場でめちゃくちゃな低賃金で、スピーチしてた当事者の方もトリプルワークして子供をなんと

か養っているという方ですね。そういう話は多くあって、とても大変なんだけど、すごいスピーチが力強い人でしたね。スペイン語のコールが面白いんですよ。とにかく労働者の声を聞けというスペイン語のコールがあって、それがリズムが良くて、大盛り上がりだったんです。次に「パレスチナと連帯する世界の労働者」です。

冨永　テックワーカー(＝IT 労働者の人たち)がかなり話していて、テックワーカーの中に「No tech for genocide 」とか「No tech for Apartheid 」(＝アパルトヘイトとかジェノサイドのためのテック労働はいらない）という運動が広がっていて、Google とかアマゾンの労働者たちが、虐殺とか戦争に加担させられるように仕向けられていると声をあげていました。

パレスチナの問題に関して、労働者層の感覚とユニオニストたちの感覚のギャップを埋めるにはどうすればいいのかという話もあり、パレスチナの労働者のことを知らないといけないという話が出ていました。今パレスチナとかガザにいる労働者たちはどういう状況なのかを伝えていくことがすごく重要だと言われていて、そうだなと思いました。私たちの労働とか生活がパレスチナの人たちの労働とか生活にどうつながっているのかを、労働者たちに伝えていくことも重要だと言っていました。

尾林　テック労働者の中でやっぱりパレスチナ問題への関心がすごく高まっているんですね。

冨永　そうですね。もともとテック業界が労働運動に負の影響をもたらしてきたみたいなことをテック労働者の当事者の人が言っていて。それは多分テック業界がそもそも資本主義にすごく貢献する業界だからだと思うんですけど、その中で労働者たちが立ち上がって労働運動しているのはすごく力を感じました。日本でも Google のユニオンとかができてますが、つながって色々やれたらいいなと思いました。

UAW（全米自動車労組）のストライキ新戦略

尾林　次行きましょうか。「UAW（全米自動車労組）のビッグ3ストライキの教訓」っていうワークショップが、一番面白かったんですけれど、GM、フォード、クライスラーでビッグ3と呼ばれる自動車会社ですね。毎回統一でストライキやるんです。同じ期間に一斉に。その戦略を今回変えたのです。一斉にじゃなくて一か所でストライキをやって要求飲もうとした企業に対してはストライキを「じゃあ延期してあげるよ」と言って、要求飲まなかった企業には本当に「ストライキをお前の所だけやるからな」と言って GM、フォード、クライスラーに対して競争させるんですね。組合への対応がどれだけいいかっていう競争をさせて、結果的に25%の賃上げを勝ち取るという半端ではないストライキでした。

現場の組合員で真ん中に写ってるのがジーンさんっていう、GM の自動車を作る最終段階の工程を担当している組合員です。ディーラーからの注文を受けて少し車いじる本当に最後の最後の工程の人ですが、生産性がないと会社から言われて、正社員なんだけどほかの正社員よりもすごい低い賃金に抑えられてしまっている。階層賃金と言うんですけど。その待遇が低い方の賃金を上の方の階層とほぼ同額に近づけるという大きな成果を勝ち取った。要は限定正社員が正社員に近い賃金をとったみたいな、そういうストライキをやった人ですね。

原田　日本の公務労働で会計年度職員が正規公務員の賃金を勝ち取ったみたいな感じですね。

尾林　そういうことですね。夢がある。本当にストライキに向かってエキサイトしていく、とてもファンタスティックなストライキだったよと、興奮したストライキの経験を話してくれてすごいいいなあと思いました。冨永さん、グローバルサウスにおける労働組合について。

冨永　最後に歌を歌ったんです。I’m unionist （＝私はユニオニスト）って歌っていて、何語かわからなかったんですけど、グローバ

ルサウスの人達がナイジェリアとパキスタンと中国の人達が登壇して、グローバルサウスの問題を解決しないと何も始まらないということを言っていて、組合の組織率落としてるのは、そのグローバルサウスの人達のマイノリティ、周辺化された人たちを巻き込めてないからだと言っていて本当にそうだなあと思った。

今日本でもやっぱり正社員中心の組合がずっとあって、企業側の組合というのがまだまだあるけれど、ジェンダーの人たちとか、そういう人たちを巻き込んでいくのが、レイバーノーツでも言ってるランク・アンド・ファイル労働運動に重要な点だなと思いました。

冨永　バイデンについて話をしたいです。レイバーノーツは共和党ではなく民主党の支持だったのかな。どちらかと言えば。

原田　レイバーノーツ自体は、政党支持はしないという立場で、シカゴ市長みたいに結局組合から出てくる政治家は、基本的に民主党から出るという流れは確かにある。

冨永　UAW（全米自動車労組）のショーン・フェイン委員長は民主党押しだったんですよね。

尾林　UAW は今回バイデンを押すって決めちゃっている。

冨永　そうですよね。それで参加者の人たちが批判してて、イスラエルが4万人のパレスチナ人を殺したということを考えると、その他のことがトランプよりもマシだからといって投票するには値しないと。やっぱりトランプもバイデンも同じぐらいに悪いんだと言って批判していた。中絶の権利もトランプが大統領になると全米で禁止されるということもあるけど、パレスチナはずっと76年間苦しみ続けてきた。それをここで終わらせないといけないんだっていうことを考えると、バイデンにも投票しちゃいけないと言っていました。

尾林　民主党への批判は相当強いですよね。レイバーノーツの参加者は。

原田　レイバーノーツ自体も民主党への批判は強いけれど、UAW などはまだ民主党を支持している。レイバーノーツで称賛され成果が上がって、今回スピーチしてる人の中でも民主党を支持している組合もいっぱいあって、そこはすごい複雑です。

公務公共一般メーデー当夜祭会場で